ISSN 0289－4130

研究紀要

第32号

中井遺跡における縄文中期の食用植物について　上野真由美
　－レプリカ法による土器種実圧痕の同定－　佐々木由香

網目状撚糸文の観察（１）　魚水　環

古墳時代前期の「外来系木製品」について　福田　聖
　－反町遺跡出土の籠と籠脚をめぐって－

埼玉県における古墳時代前期の玉作り　赤熊　浩一

焼失住居から見る古墳時代前期の植物利用　滝澤　誠
　高橋　敦

後・終末期群集墳と集落の展開について　青木　弘
　－目沼古墳群と槙野地北遺跡の関係－

須恵器工人の瓦づくり－泥条盤築技法導入の背景－　昼間　孝志

ほるたまセミナー特別講演録　大塚　初重
　「東国の出現期古墳と大和政権」

2018

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

口絵

序

中井遺跡における縄文中期の食用植物について……上野真由美・佐々木由香　（１）
　－レプリカ法による土器種実圧痕の同定―

網目状撚糸文の観察（１）……魚水　　環（13）

古墳時代前期の「外来系木製品」について……福田　　聖（21）
　－反町遺跡出土の籠と籠脚をめぐって－

埼玉県における古墳時代前期の玉作り……赤熊　浩一（33）

焼失住居から見る古墳時代前期の植物利用……滝澤　誠・高橋　敦（45）

後・終末期群集墳と集落の展開について……青木　　弘（61）
　－目沼古墳群と槙野地北遺跡の関係－

須恵器工人の瓦づくり－泥条盤築技法導入の背景－……昼間　孝志（79）

ほるたまセミナー特別講演録「東国の出現期古墳と大和政権」……大塚　初重（93）

ほるたま考古学セミナー特別講演録

東国の出現期古墳と大和政権

明治大学名誉教授　　大塚　初重

こんにちは。ご紹介いただきました大塚でございます。今日は、午前10時から私がお話をする予定だったのですが、上野駅の19番線で新幹線のドアが目の前で閉まってしまいました。熊谷に停まる後続の列車がなかなかないというわけで、大宮まで来て、そこからタクシーで来ました。お詫びいたします。私の90歳の人生で、こんなことは初めてでして、年季が回ったなと感じています。

さて、今日私に与えられたテーマは、「東国の出現期古墳と大和政権」というテーマであります。

実は最近日本の考古学研究では、2002年になりますか、佐倉の歴博（国立歴史民俗博物館）がAMSという新しい放射性炭素の年代測定結果を発表して、弥生時代のスタート、始まりを紀元前10世紀後半、これまでより約500年も年代を引き上げました。かなり日本の考古学の年代論は混乱しています。現在でも歴博の年代論を信じていない人は結構います。弥生時代の始まりは紀元前700～800年がいいところかな、これが紀元前10世紀後半ですから400～500年の幅がある。

それにしましても、古墳時代の年代がそう大きく変わることはございません。しかし、土器の研究が非常に発展してきて、先ほどのお話にございましたように、外来系土器、要するによその地域の土器が動いて来ている。土器が一人で動くはずはないから、これは人間が個人であれ、集団であれ、日本列島内を動いている、移動しているということは紛れもない事実だと思います。最近では、九州宮崎県の宇佐海岸で弥生時代中期後半の瀬戸内西部の広島・山口から愛媛の弥生土器が、なんと宮崎県の海岸地帯に分布する。そこに古墳が生まれてくるんですけれども、そういったことがわかって参りました。日本列島内の一部とか古墳時代だけではない、弥生時代から色々な物が動いているということが明らかになってきております。

そういったこともございまして、日本の古墳時代の研究も私が昭和21・22年に大学に入って考古学の勉強をする頃は、偉い私の恩師の後藤守一先生から、「大塚君、関東で4世紀代の古墳を掘ったら、まあ4世紀の終わりから5世紀のはじめというくらいに、50年から100年位近く年代を新しくするのは常識だぞ」と教わりました。従って、先輩や多くの先生方は、皆さん東日本の古墳の出現を畿内よりも50年、あるいはもう少し年代を新しくするのが常識でございました。

ところが、この20年間くらい全国で、大規模な発掘が行われておりますと、「これは神奈川県の土器じゃない、これは埼玉県の土器じゃない」という例がたくさん出てきました。

昭和28年くらいに埼玉県東松山市五領の育心寮という子供たちの修養施設がございまして、そこの育心寮の子供たちが、農作業をしている時にまとまって土器が5～6個出たんですね。その土器が噂によると、南関東では見たことがない土器だ。土器に非常に精通していた杉原荘介先生に「早く見てこい」と言われて、東松山に来たのを思い出します。

その後、中山淳子さん（後に北海道大学教授になった岡田淳子さん）が東松山に来て実測したんです。彼女が実測した土器を見ると、絶対にこれは埼玉や神奈川や東京にはない土器だ。どこだろう。どこだろう。私は昭和27・28年頃に出雲の貝塚を発掘したことがありまして、島根県出雲の土器が多少わかっておりました。それでしたので、鼓形器台と呼ばれている他にはあまりない鼓

のような恰好をした器台。これが出雲の土器だということがわかりました。しかも、畿内の布留式土器とすぐわかるような4世紀後半の土器も埼玉県の東松山からまとまって出ました。出雲の土器や北陸の土器、畿内の土器が、地元の埼玉の土器と一緒に出る。これは何だ。そういうことが昭和28・29年ごろ話題になったわけです。それが五領遺跡の発掘にも関わるんですけど、そういうことで関東、南関東の古墳時代前期の土器ということで五領式土器というものが問題になってきました。

それはそれといたしまして、日本の考古学で最大の関心事、最大のテーマといえば、日本列島における大和政権の成立、つまり日本古代国家の成立はいつか。「七五三論争」という言葉があって、３世紀代、巨大古墳ができる５世紀代、いやいや律令体制に入る７世紀代という、それぞれの研究分野によって考え方が少し違います。

我々考古学者は、大和盆地に全長280mを超えるあの有名な奈良県桜井の箸墓古墳、あるいは箸中山古墳とも云う宮内庁書陵部の大市の墓、これは全長280mです。この大きな前方後円墳が登場するのがいつかということが、大きな問題なわけです。西暦2000年に関西を襲った台風で、箸墓古墳に立っていた木が30本ほど倒れました。大木の根っこが起き上がったんです。根っこと一緒に、地表には土器の破片がたくさん出ました。宮内庁がすぐに調査して、全部でレポートを読むと約3500点の土器破片が出た。その出た土器の破片を実際に見ると、後円部上の土器と前方部上の土器が、多少差があるようなところもあるんですけど、岡山県の土器と共通の特徴があります。

亡くなった岡山大学の近藤義郎さんが岡山県倉敷市楯築の弥生後期後半の墳丘墓、丘陵の上にある主丘が40m位、東西に突出部の付いたまるで双方中円墳のような墳墓、そこから出る土器が普通の埴輪ではない。持ち込まれた土器を見て、「なんじゃこれは」というようなことで、楯築の特殊器台・特殊壺形土器というような名前をつけて研究を始められました。実は、西暦2000年に奈良県桜井の箸墓古墳の倒木の根から発見された土器には、透かしがある。壺形土器には突帯が巡っている。器体には、透かしの周りに櫛描きやヘラ描きの模様がある。これは、倉敷の楯築墳丘墓から出てきた葬祭用の土器と同じ系列の土器じゃないかと。岡山県の瀬戸内東部の倉敷市の土器と、奈良県の奈良盆地の東南、日本の前方後円墳の発祥の地だと多くの研究者が考えているその地域のお葬式用の土器、葬祭用の土器が、よく似ています。瀬戸内東部の岡山の土器が大和の土器と共通する特徴を持っている。「これは何だ」ということで、その内に島根大学の田中義昭さんや渡辺貞幸さんたちが、昔は出雲市だったんですけども出雲商業高等学校のグランドのそばにあった西谷３号・西谷２号と言われる四隅突出墳丘墓、四角な古墳で四隅が出っ張っている四隅突出墳丘墓を島根大学が掘った。その結果、４つ以上の墓壙があって、そのお葬式に使った最後のお祭りに使った土器を、古墳の埋葬遺構の上に据え置いている。これを発掘した結果、なんと日本海沿岸の島根県の出雲の墳丘墓から出てくるお葬式用の特殊器台・壺の文様や器形が共通しているということがわかりました。なんで日本海側の島根、瀬戸内の岡山の吉備と大和で共出しているんだということです。

その前後に、天理から桜井に行く途中のオオヤマト古墳群のなかにある西殿塚、手白香皇女衾田陵と宮内庁が言っている古墳を、時々宮内庁が墳丘の崩れなどを見聞しているんですけども、宮内庁の陵墓課の職員が表面に出ている土器の破片を100個ほど採取するんです。その宮内庁の職員が採取した破片には、なんと透孔があって、突帯がある。つまり、桜井の箸墓古墳から発見された

土器と同じ系列にある土器と判断し、見たということです。だんだん調べてみると、大和盆地の前期古墳から出て来る土器、多くの古墳から出てくる土器に、この楯築弥生墳丘墓からの特徴をもった土器が出てくる。これはどうやら大和盆地の中で、もし 280m の箸墓古墳が最大で最古の前方後円墳だとすれば、その奈良県の最初の前方後円墳に岡山の楯築墳丘墓と同じ特徴をもった土器が出てくる。いや、島根県にもある。島根県出雲の西谷３号墓には、北陸の土器つまり福井の土器も混じっている。簡略に言ってしまえば、中央の大和の盆地で大和政権の成立を大型前方後円墳が物語っているといえば、それは箸墓古墳の登場をもって言えると思うんです。その箸墓古墳の登場の背景に、瀬戸内東部の倉敷の楯築墳丘墓、島根県出雲の西谷３号墓のような山陰の土器、広範な地域のバックグラウンドがあって、大和盆地の桜井に 280m の大型前方後円墳が登場するんだろうという風にこのごろ考えざるを得なくなってきました。

その箸墓古墳については色々問題があって、「卑弥呼の墓だ」云々と大正時代から言われております。私はそう簡単には断定できないと思っているんですけども、白石太一郎さんなどはもうかなり断定的ですよね。そういう風な、どうやって全長 280m の大型前方後円墳が登場してくるのか。その前段階を調べなければならない。

ということになってきて、ここ約 20 年間にわたって橿原考古学研究所を中心として、奈良盆地の東南部の天皇陵指定以外の古墳の中から順次、発掘調査が行われています。特に纒向地域の纒向石塚とか東田大塚とか６つか７つくらい古墳があります。それらはホケノ山古墳を含めて大体 80m から 90m くらいの前方後円形をして、周りに濠が巡っています。しかし、すぐそばにある箸墓古墳は全長 280m です。200m を超えるような大前方後円墳の上に上がられた経験のある方はわかると思いますが、膨大なボリューム感ですよ。280m、300m 近い土盛りをした墳丘は、ものすごい土量ですよ。80m、90m の前方後円墳とは、まるっきり物理的に土木量が違うということはすぐわります。橿考研は「箸墓古墳が登場する前段階はどうだった」ということで、纒向古墳群の調査をずっと行っています。残念ながら、纒向古墳群のホケノ山古墳以外は、陸軍の高射砲陣地の中で主体部が完全に壊されています。周りの濠を掘って濠の埋め立て状況を観察して、その古墳の築造年代を示すことくらいしかできないんですね。その結果、纒向石塚古墳が纒向古墳群の中では最も古いだろう。最も新しいのは 80m、90m 位の前方後円墳です。皆、後円部が偏円形なんです。正円、まん丸じゃないんですね。それにやや短い突出部が、前方部が付いている。だけと一応前方後円形はしている。80m、90m、100m 以内位の前方後円墳である。

そして研究が進んでくると、ほとんどが庄内式と言われている関西で出てくる土器が出土しています。庄内式土器は布留式土器と実際には細かく分けているんですけれども。かつて戦後間もない頃に、奈良盆地の大和で一番新しい最後の弥生土器はどういう土器かというと、亡くなった小林行雄先生が大和の奈良県唐古・鍵遺跡のピット 45 号地点の穴から出た一括出土品が奈良県では最後の一番新しい弥生土器だというふうにいわれておりまして、また我々もそう思っていました。ところが、纒向古墳群の濠から発見される土器はいわゆる庄内式土器でありまして、布留式土器よりも一時期古い。それで、ホケノ山古墳というのを数年前に発掘しました。壺形土器が 11 個出ました。それは発掘者によれば、全部庄内式土器であるという。庄内式土器は大阪の庄内遺跡により名前の付けられたもので、唐古・鍵遺跡ピット 45 号地点の穴からは庄内式土器が出ています。布留式土器、布留というのは天理市の布留町、今の天理教

本部のあるところですが、このあたり一帯にある４世紀後半から５世紀初頭くらいの大遺跡なんです。その名前を取って、古墳時代前期の土器を布留式土器と言いならしてきました。そのホケノ山古墳は庄内式土器、300m 離れた墳丘 280m の箸墓古墳で濠の水抜きした際に発見された土器は布留式土器であることがわかりました。今は布留０・１・２・３式というふうに細かく型式が分かれています。纒向もⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ。庄内も１・２というふうに分けられているんですけども。それぞれ関西で分けている土器型式があるから非常に困る。大雑把に行って庄内から布留で、庄内は古墳出現期なんですよ。しかも、80m、90m の前方後円形の濠をもった古墳で、ホケノ山古墳は葺石を持っておりますので、私は奈良県の纒向の石塚以降、石塚・勝山・東田大塚古墳と呼ばれる数基の纒向型前方後円墳は、私は古墳という概念でとらえたいという風に思っている。箸墓古墳から、古墳ということではなくて、280m の箸墓前方後円墳が登場する前に、そういう 100m 未満の前方後円墳が築造されているというようなことをこの頃わかってまいりました。

1964 年以降、所得倍増の池田内閣登場以降、東名高速、名神高速道路、東海道新幹線、ニュータウン造成、農業構造改善事業、全国大規模な発掘調査が開発のために行われました。昭和 20 年代の日本考古学の大学の大発掘というのは、先生以下十人の学生が一週間か十日来てというのが大発掘でした。今は何万㎡もの広い土地をすべて、全面発掘するような発掘調査が行われております。反町遺跡の例じゃないんですけと、全く今までに気が付かなかった、わからないような事実が、我々の目の前にどんどん露呈されてくるわけです。それは、1960 年、昭和 30 年代前の日本考古学と、それから以降の日本考古学は全く質的に変わってきたということなのです。

そういう大発掘が行われてくると、各地で、その地域では出ないような、生まれてこないような土器が遺跡から出てくる。住居跡の中から在地の土器、千葉県なら千葉県の土器と一緒に千葉県ではない土器が出てくる。もちろん量が多い、少ないがございます。

確か早稲田大学の、東京都新宿区戸塚町にあった野球場の安部球場が校外に移りました。そこが早稲田大学の情報科学センターの施設になっているんですが、安部球場が無くなった後に大発掘が行われました（下戸塚遺跡）。早稲田大学が掘ったのです。直径 110m、半径 100m 近いような濠を巡らせた環濠集落が出ました。弥生後期の後半、出てくる土器の中で、20％か 30％まで行かない位の割合で、東京都新宿区の土器ではなく静岡県の土器で、東海地方の特徴を持った土器が出る。

その後の神奈川県海老名市の本郷遺跡や秋葉山墳墓群の調査で、神奈川県の土器ではない土器が出てくる。神奈川県綾瀬市の神崎遺跡は 50 ～ 60m の環濠集落なんですけれども、全掘した結果、出てくる土器の 97 ～ 98％が静岡の遠江、静岡県の西の方の土器だということがわかりました。静岡県掛川市のすぐそばの菊川市に遺跡がございまして、菊川式土器という型式がある。その菊川式土器だとか、より西の山中式土器、そういった東海地方西部の土器が本当に多量に出てくる。こりゃあもう、個人的な移動とか何かではなくて、村落の集団移住じゃないかと考えざるを得ないような土器の移動なんですね。ただ問題は、なぜ人が動いたのか、静岡の遠江から東京都新宿区や神奈川県の海老名市周辺までムラを挙げて移動したのか、それは、よくわかりません。

考古学は戦争とか戦いの現場を、発掘で証明することはほとんどできないんじゃないかと思うんですね。鳥取県の遺跡では、実際に殺傷を受けた人骨がたくさん出てくる遺跡があるんですけども。実際にはなかなかない。この頃、埼玉県をは

じめとして外来系の土器が出ていますけれども、粘土を分析しますと粘土は地元の粘土である。反町遺跡のレポートが出てますけれども、反町遺跡から発掘された東海系の土器とか北陸系の土器、そういった土器を分析しますと、埼玉県の反町の地元の粘土を使っているということがレポートされておりますから、作った人はその地域と関係がある、それぞれの地域と関係があるのかも知れませんけども、埼玉県にやってきても、自分たちのマザーランドというか母なる地域の土器の特徴をそのまま残している、ということはあり得るわけです。

これからの日本の考古学の問題になっている外来系土器の問題は、なぜ土器が動くのかということです。「土器が動く」ことは、経済的な、政治的ないろんな理由が絡み合うと思うんですね。だけれども、答えがそう簡単にはなかなか出てこない。邪馬台国の問題と深く絡めて、倭国大乱とか色んなことをおっしゃる方がいますけれども、全国の他地域の土器である外来系土器の移動をそう簡単には言えないと、私は今思っているわけです。

だから昭和28年頃に、埼玉県の東松山の五領遺跡で子どもたちが発掘した見たことのない土器というのは、ある部分のいくつかは布留式土器、つまり奈良県大和の土器の特徴を持った土器があって、その中に出雲の特徴をもった小型丸底土器などがあってということですね。畿内や日本海沿岸の出雲の地域とかなり関わりがあった、ということだけは言えると思うんです。それが五領式土器と言われているように、多分４世紀代の後半くらい、５世紀の初めくらいという年代を与えていると思うんですけれども、その頃になんで出雲から、なんで東海道筋から、大和からという風なことになるわけです。

ところが、昭和29年以降、千葉県でも開発が進んでまいりまして、千葉県市原市の神門３号・４号・５号墳の実測図が図版２の右側にございます。50mのスケールがありますけれども、そんな小さなものじゃない。40m超えるような、あるいは50m超えるような、後円部がいびつで、濠が完全に回っていない。この発掘に関わった早稲田の田中新史さんなどは、「大塚先生、５号墳の濠の溝は前方部の先端部が完全に巡っていないんですよ。15cm位の落差があるだけなんですよ」と伺ったことがあります。つまり、こういう古墳の周りに巡る濠の巡り方、これもある時期差、年代差を表しているのも事実です。さらに、この図版２の５号墳から出ている銅鏃・鉄鏃は多孔で、穴がたくさん開いています。こうした透し穴がたくさん開いた鉄鏃・銅鏃は東海地方、遠江の地域から名古屋の方で流行ったものなんです。更に右側の土器の実測図を見ると、石野博信さんがやって来て見るなり「これは庄内や」と怒鳴ったんですね。石野博信さんが庄内式だと、関東で、東京で言うとすぐ庄内式になってしまう。地元の奈良県の纒向を長年掘った石野博信さんが庄内式だと言い切ったわけだから、一部庄内式に入ってくる。３号・４号・５号墳という風にある程度年代順があるんだけれども、東海系の土器の特徴をかなり強く持っている。つまり東京湾の東側の沿岸の市原の養老川下流域の地域に、最初に登場する前方後円墳は、纒向型前方後円墳といえるような墳丘、土器その他の鉄鏃のような東海系の特徴を持っているということになります。庄内式土器ということで石野博信さんとかは３世紀だよといいます。３世紀ですよ。私が学生の頃は、後藤先生に「関東は田舎だ。畿内から比べたら文化が伝播するのに時間がかかる。だから４世紀代の古墳を掘ったら、５世紀代のはじめにしていたら間違いないよ」と教えられたんです。ところが今や、土器が動いている。東海系の土器や北陸系の土器、中国系の土器、各地の土器が、この南関東の千葉県や埼玉や群馬や東京の遺跡から出てくるということは、人々が動いている。東京から京都までが

歩いて約２週間で行けるんですよね。1700 年、1800 年、2000 年も前のことですから、とても２週間で歩くというわけにはいかないけれども、50 年、100 年もかかってようやっと関東地方に古墳文化が伝達するという理解の仕方は、もうそれは古い。

最近の島根・鳥取県などの出雲・伯耆の地域の日本海沿岸の遺跡の発掘が、北陸新幹線のこともありまして相次いでいます。いろんな発見が次々出ています。したがって、この頃は日本海沿岸の研究も活発ですね。つまり鳥取や出雲の人にかかると、「大塚先生、出雲や日本海沿岸の方が表だよ、太平洋沿岸の方が裏だよ」と冗談交じりに言うんです。そういうこともあって、たしかに、日本海側の最近の研究は著しく進んでおります。それによって、土器の年代論やそういう相対的な考え方が、この 10 年、15 年で変わってまいりました。

そこで、図版３を見ていただきたいんですけれども、これは千葉県の木更津市高部 32 号墳です。これは木更津の地域で、市営住宅を丘陵の上に建てるんで、結局発掘をせざるを得なかった。そしたら 60m 前後の前方後方墳が見つかりました。最初に紹介があったのですが、私が昭和 38 年に前方後方墳研究で学位を取ったというお話がございました。私が前方後方墳の研究を始めた昭和 29 年から 30 年代は、出雲で９つ、全国でも 50 例しかなかった。今は 550 基を超えるという。したがって、考古学の研究というのは、資料がたくさんある状況と少ない状況とでは相当結論が違ってまいります。でも残念ながら、致し方ないんですけれども。

この木更津の高部 30 号墳・32 号墳は、２つとも前方後方墳です。実は前方後方墳と呼ばれているものの他に、前方後方形周溝墓と呼ばれるものがあります。私は前方後方形周溝墓に盛り土はあったと思います。低い墳丘が後に取り払われて、現在だと前方後方形周溝墓だと言います。墳丘を持った前方後方墳と前方後方形周溝墓は、いろんな条件はあるんでしょうけれども、私は両方存在したというふうに思っています。しかも、弥生時代の前期から弥生時代の墓制は方形周溝墓で、これは関西には弥生時代の前期から方形周溝墓があります。その方形周溝墓の一画が突出部になって前方後方形周溝墓になる。前方後方墳形周溝墓がやがて前方後方墳になる。それはやはり正しい見方だと、現在は思います。この高部 30 号墳と 32 号墳から掘り出された土器は、図版３の右側に実測図を載せてあります。高坏などは東海系の特徴をもち、手焙形土器も出ています。

更に高部 32 号墳の墳丘測量図のすぐ下に鏡の破片の図面を載せています。半肉彫りの四獣鏡ですね。半肉彫りの獣帯鏡ですね。破片なんです。弥生時代の後期あたりから、鏡を破砕して、わざわざ一面分割して、墳墓の中に入れるという風習があります。完全な鏡を割って入れている場合もあるし、破片だけを入れている場合もございます。高部 32 号墳から半肉彫りの四獣鏡が出ましたが、これは三角縁ではないんです。平縁、半斜縁、あるいは斜めの縁、斜縁鏡といっています。すぐそばにある 30 号墳からは、これも完形の鏡を割って、７枚の鏡片が出ている。これも半三角縁、あるいは斜縁の二神二獣鏡であります。前方後方墳があって、前方部の濠は前方部の先端をちょっと回るけれども、濠の幅は狭い。高低差のないという位のものです。土器の年代は、どちらかといえば庄内系の土器というふうに言われています。しかも、三角縁神獣鏡ではない。

ご承知のように、昭和 23 年でしたか、京都から奈良まで行く JR 奈良線の途中の南山城で、鉄道工事中に偶然に椿井の大塚山古墳の前方後円墳の後円部の竪穴式石室に穴を開けてしまいます。そこから 42 面以上の鏡が出ました。その 42 面以上の鏡のうちの 32 面は三角縁神獣鏡でした。残りは画文帯神獣鏡や内行花文鏡などの後漢鏡、

すなわち中国の後漢代の鏡でした。いろんな話があるんですけれども、長くなりますからその辺は触れないでおきますが、これは大ニュースでした。南山城の京都の椿井の大塚山古墳の竪穴式石室から、三角縁神獣鏡が32枚、それを工事関係者が皆インマイポケットしたんですよ。皆ポケットに入れたんですね。ポケットに入れるといったって、20cmを超える鏡だから入らない。みんな破片ですよ。バケツ持ってきて分けたりした。

やがて警察が入ってきて、取り調べがあって、全部それが元に戻るんですけれども、そういう事件がありました。調査したのは京都大学です。その鏡を一番中心になって研究を行ったのが、小林行雄さんです。小林行雄さんは、その後の全国の前期古墳の鏡を見て鋳型の傷や文様の特徴が同じ、つまり同じ鋳型で造った同笵鏡に着目します。そして全国の古墳から出ている三角縁神獣鏡の詳細な型式学的研究を行います。その結果、京都の椿井大塚山古墳だとか、岡山の備前車塚とか主要な古墳が結構たくさんの三角縁神獣鏡を持っていて、多分そういう中心人物が、周辺の各地の有力な氏族に三角縁神獣鏡を渡したのだろう。分与だ。分け与える。賜う、恩賜という言い方もあります。いろんな反論もあるんですけれども、そういったセンターがあって、そのセンターから地方の有力な首長に鏡が渡される。それが、大和政権と地方首長との結びつき、政治的な同盟につながるんだというような理解になってくるんです。それが大和政権の形成だというふうになって、日本の古代史学界でも非常にショッキングな研究テーマで今日まできました。

ところが、最近になってさらに各地で色々な発掘が行われる。特に東海地方では愛知県埋文センターの赤塚次郎さんが、清州市の廻間遺跡と尾西市の西上免遺跡を掘ります。私は、発掘現場に行きました。運輸省関係のトラックがあって、「これに乗ってください」といって、トラックに乗ったらズーッとトラックの荷台が5m位上に上がりました。道路工事の発掘現場というのは、こういう機械で上から撮影するのにも、ヤグラなんかで撮影しないでもいいんだとびっくりした思い出があります。この西上免や廻間遺跡の数百個の土器を、この赤塚次郎さんは克明に型式の研究を行いました。つまり、廻間Ⅰ・Ⅱ・Ⅲというように分類しました。廻間遺跡の前方後方形周溝墓から出た数百個の土器も時間的な幅がある。つまり、最初の前方後方形周溝墓を造って、遺体埋葬が行われて、おそらく近親者やムラの人が集まってお葬式をやる。そのとき使った土器はケガレを嫌うために、現場に置いたり、溝の中に埋めたりします。三回忌や七回忌があったかわからないんですけれども、そういう追善の葬祭が行われていたんだろうと私は思っています。その時に使った土器は、時期が5年とか10年とかわかれています。廻間式土器の型式が変化しているというのを赤塚次郎さんは見抜いて、廻間Ⅰ・廻間Ⅱ・廻間Ⅲというように克明に分けています。その隣の西上免遺跡でも、道路を造るので発掘を行いました。地上には墳丘がなくて、掘ってみたら方形周溝墓、前方後方形の周溝墓だということがわかった。これの中に多量の土器があった。この西上免でも彼は土器型式を細分します。そして今や東海地方の土器は、東日本における弥生時代終末から古墳時代前期の型式編年の一つのメルクマールになっている。尺度になっているのは事実です。この廻間Ⅰ・Ⅱ・Ⅲという赤塚次郎氏の行った丹念な土器編年を、型式としてかなりの研究者が使っているのは事実であります。

その後、図版4の長野県松本市弘法山古墳の発掘が行われています。これは60m位の前方後方墳です。紛れもない前方後方墳です。丘陵の上に造ってある。この主体部の竪穴式石室の直上から、完形土器が二十数個出てきました。その内、実測図の1の壺形土器は変わった文様、飾り文様を持

ち、装飾土器を含んでいる。東海地方の研究者は、「これは東海地方のパレス式（宮廷式）土器じゃないの、なんで長野県の松本にあるんだ」と思いました。さらにその下の高坏をみますと、高坏の図の下から２列目の８・３は、坏部と三角形のラッパ状に開いた脚部の間に櫛描文が10数本、きれいな線が通っている。これは赤塚次郎氏が「大塚先生、廻間Ⅱだよ、下げてもⅢだ」と言いました。では、廻間Ⅱはいつ頃なのか。「暦年代は230年から240年位かな」と彼は言いました。しかし、昔の大先生はそう簡単に230年、240年なんてことは言わなかった。そういう風に考えられるけども、そのあたりが穏当かなと答えています。

今は佐倉の歴博でやった箸墓古墳のカーボン14（炭素14）の測定年代は、240年から260年頃と学会で発表しました。その一週間前に新聞が発表したんですよ。学会で発表してから新聞に載せれば良いのですが。

なんで240年から260年なのか。それは図らずも、橿考研の寺沢薫さんが、「箸墓古墳から発見されている土器の型式年代からいうと、240年から260年ですね」といってました。その後、寺沢さんは少し年代を下げました。奈良県桜井の箸墓古墳を260年から280年位に、すこし古墳の年代を新しくした。その一連で、寺沢さんは「卑弥呼の墓じゃなくて、次の台与かな、壱与かな」と発表しました。これも、昔の大先生はそう簡単には言わなかったんですよ。でも、それを言わないとテレビ・新聞が取り上げないんですよ（笑）。だから皆言うんですよね。「先生、年代言わないと電話切らない」と、その状態が嫌なんですね。だから箸墓古墳が240年から260年、もしその年代で間違いないとするなら、邪馬台国の卑弥呼と関係するんですね。年代が。どうしても関わってくる。ということで、話題になるということです。

この弘法山古墳からは、斜縁四獣文鏡が出ている。直径が19cm位の鏡ですけれども。半肉彫りの文様が浮き彫りになっています。そして、鏡縁の断面が斜縁あるいは半三角縁なんですね。本当の三角縁はもっとガッと飛び出るんですけれども。そういうことで、土器論から言ったら赤塚さんが言うように230年から240年、つまり邪馬台国の女王卑弥呼が魏に遣いを出したのが景初三年の239年、三世紀の前半です。その頃の年代の射程距離に入ってきたということです。従って、そう簡単に邪馬台国論と桜井箸墓古墳を結びつけるわけにはいかない。

次に、図版５をご覧ください。今から３年ほど前に私も調査に関係したんですけれども、静岡県沼津の高尾山古墳と呼ばれていた61mの前方後方墳です。これは、かなり見事な墳丘を持った前方後方墳です。これも高速道路で壊すことになったのですが、沼津市長が判断に困ってまだ壊してないんですけれども…。この緊急調査が行われたんです。その結果、この高尾山古墳の墳頂部から、たくさん土器の破片が出ました。更にこの前方後方墳の周りの濠の中からも数千点という土器の破片が出ました。それが図版５の口縁部付近に隆起帯、タテの棒状浮文、隆起線文が入っている壺形土器です。口縁部に独特の特徴をもつ。その断面図見てもおわかりのように、これは静岡県の人に聞いてみたら、大廓式土器、大塚の「大」に「廓」と書きますが、大廓Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと細かく分かれております。地元で土器を勉強している方の説によれば、「大廓Ⅰから大廓Ⅳの段階まで、この古墳の脇でお祭りをして、お祭りに使った土器をそこに埋納する」というシステマティックなそういうものだと理解をしています。では、大廓式土器はいつか。それに伴って鏡が出ています。上の方に、上方作鏡の浮彫式の獣帯鏡。これも三角縁じゃないんです。半三角形か斜縁なんです。この大廓式土器を沼津の現地に行って「この年代を、どう思いますか」と聞いたら、「230年」といい

ました。沼津の研究者は赤塚さんの土器の年代論を受けていると思うんですね。それが間違っている訳じゃないんです。つまり、土器の相対的な年代が古くなっているというのは事実です。その墳墓を墳丘墓と呼ぶのか、古墳と呼ぶのかは、研究者によって違います。確か大阪の都出比呂志さんなんかは墳丘墓と呼んでいると思う。私は「古墳」とも、言うべきだというふうに思っているんです。その、そういう、つまり 250 年、邪馬台国の３世紀の半ばよりも前の段階に登場するような纒向型古墳なり、各地における前方後方形周溝墓なり、前方後方墳は大和で 280m の大前方後円墳の前に出現してくる。年代的には 10 年、20 年、30 年そんなに長い時期でもないくらい前に、各地で墳丘墓ないし古墳が登場してきている。伴う鏡は全部斜縁、半三角縁と言われる三角縁神獣鏡ではない、というのは事実です。

そういう中で少し資料を広げてみますと、図版６は私が集め得たこの資料なんですけれども、奈良や大和や兵庫や吉備や出雲だけではなくて、全国各地に 250 年より前の三角縁神獣鏡、つまり弥生後期後半、それは古墳出現期と従来言われてきたような時期に、墳丘墓あるいは古墳といわれる墓制が出てくる。例えば一番上の加古川市西条 52 号が有名です。掘ったけどよくわからなかったんですね。前方後円形の墳丘墓なんです。そこから実は鏡の破片が出ているんです。破砕鏡。その下の岐阜県美濃市観音寺山古墳は、報告書では墳丘墓としてます。方格規矩四神鏡が出ています。その下の四国の徳島県鳴門市西山谷２号墳は、徳島県の埋文センターの庭に移築して、見られるようになっています。そのほかに鳴門市には萩原１号墓と２号墓という積石塚があります。これも古い土器が出ていまして鏡が出ていたんです。これも全部三角縁ではないんです。京都府の南丹市太平洋沿岸に近い黒田墳丘墓では、立派な竪穴式石室があって、そこから双頭龍文鏡といわれる中国の鏡が割られて出ています。

次のページの図版７をご覧いただきますと、兵庫県たつの市綾部山 39 号墳丘墓では、画文帯神獣鏡が割られて出ています。その下のさっきお話ししました徳島の萩原１号墓と２号墓、これも鉄剣が出ている。器台が出ている。鏡が出ている。鏡は三角縁神獣鏡ではない。一番下の徳島県萩原１号墳から、画文帯神獣鏡が出ている。

全国、全部ではないけれども、各地域で発掘して弥生時代の最新段階の墳墓だから、ここに出現期の墳墓だから墳丘墓という名前が付いています。私は、鏡を持っている、剣を持っている、その他の墳丘の設備も揃っているので、古墳の概念で捉えていいと思うんですよ。現在でも両方を使います。墳丘墓という方もいますし、古墳という方もいます。

というようなことで、これまでここ 10 年間、各地で出現期古墳、弥生時代最終段階と言われるような古墳、墳丘墓を掘ると、鏡が割られている。破砕鏡である。鏡は三角縁ではない。確か専修大学の高久健二さんあたりが、朝鮮考古学の論文の中で書かれている。楽浪・帯方郡、特に朝鮮半島の楽浪あたりで、この半三角縁の二神二獣鏡だとか画文帯神獣鏡だとか、鉄製の素環頭大刀だとか、そういったものがかなり集中的に発見されているということを示唆されています。

日本では、三角縁神獣鏡はご承知のように、戦前発掘し 1949 年、50 年にも掘った桜井の茶臼山古墳の再発掘で鏡の破片がたくさん出ました。それをパソコンで調べたら、81 面もの鏡が出ている。バラバラの破片です。81 面もの鏡が桜井茶臼山古墳から出ているんですが、その内、三角縁神獣鏡とすべき鏡の破片は 26 面出ている。つまり奈良県桜井の茶臼山古墳、200m を超えるような前方後円墳の中には、三角縁神獣鏡が少なくとも 30 面前後あった。その数年前に橿原考古学研究所の河上邦彦さんが崇神天皇陵（行燈山古

墳）のすぐそば、500m 位離れているかな、黒塚古墳という 130m の前方後円墳を掘りました。その結果、なんと三角縁神獣鏡 33 面、画文帯神獣鏡 1 面が出ました。この中国製の画文帯神獣鏡は遺骸の頭から上のあたりにそっと置いてありました、後の 33 面はお棺の周りの石室に立て掛けてありました。私河上さんが「先生、見に来てよ」というので見に行くと、三角縁神獣鏡の副葬状況としてはちょっとぞんざいに過ぎませんか。私はもっともっと三角縁神獣鏡は、丁重に大事に扱ってお墓に入れてると思ったのに、重ねてずらっと並んでいるんですよ。がっかりしましたね。三角縁神獣鏡の扱い方が、私の思っていたのと違う。小林行雄さんのいうような、三角縁神獣鏡が全国の各地の首長に分与される。与えられる。そういうことが大和政権の政治的な意味は、もちろんあるんですよ。だけれども、そうじゃなくて、三角縁神獣鏡を伴わない。

京都の椿井大塚山古墳が昭和 23 年ですか。三角縁が 32 面。奈良県の黒塚が 33 面。崇神陵のすぐ傍の古墳でも 23 面という風にまとめて鏡が入っている。確か 1 月 17 日に東松山で行われたレポートを拝見しますと、車崎さんは、あれは完全に卑弥呼がもらった鏡、中国からもらった 100 面の内の一面だと言い切ってますけれども、菅谷文則さんが国産だと言うことですけど…。最近の出現期の古墳あるいは墳丘墓といった大古墳が出現する前の鏡の状況を見ると、三角縁神獣鏡は持っていない。しかも、すぐ持ち始める。桜井茶臼山もそうだし、黒塚もそうだし、椿井大塚山もそうだし。とすれば纒向古墳群の最後の古墳は、ホケノ山古墳だと私は思います。ホケノ山古墳からはですね、庄内式土器が発見され、画文帯神獣鏡と内行花文鏡が出ています。かつて数面出たということなんですけれども、いずれにしてもホケノ山古墳、纒向古墳群には三角縁神獣鏡がないんです。これまでのところ発見されていません。

そこで私は、今考古学の研究者の中で全長 280m のあの前方後円墳、日本最大、最古の大前方後円墳（箸墓古墳）に三角縁神獣鏡があるのか、ないのか。私は、従来はないと思っていたんですけれども、この頃はあるんじゃないかという風に想定しています。ただ、これは陵墓参考地だから掘れません。ずっと一生クエスチョンマークなんですけれども。多分もし、大和盆地で箸墓古墳が最も古い前方後円墳、典型的な大前方後円墳だとすれば、この箸墓古墳の首長は相当量の鏡を持っていてもおかしくない。日本の古墳における三角縁神獣鏡の持ち始めのお墓に最初に副葬した人が、私の想定では桜井市の箸墓古墳だろうと。掘ってはいないからわからない。けれども、その周辺の 200m を超えるような桜井茶臼山古墳にしてもメスリ山古墳にしても大前方後円墳は三角縁神獣鏡を持っていますから、この時期から三角縁神獣鏡が持ち始められる。

というと、それ以前の中国では 1 面も出ていない。朝鮮半島でも出ていない。日本でも出ていないことをどう考えるか。中国社会科学院の王仲殊先生と前にご一緒した時に、「王先生、先生はどう考えられているんですか」と訊ねると、「三角縁神獣鏡は日本」というんですよ。「日本はわかるけど、日本のどこですか」と聞くと、王仲殊先生は「畿内」といいました。王先生は今でもそう思っているんですけれども。とにかく、どこからも鋳型が出てこない。それで、三角縁神獣鏡は日本製か中国製か。朝鮮半島の楽浪帯方郡の製作も含めて中国系の鏡作り工人たちが、いっぱい大量にやって来ている。王仲殊先生がおっしゃるように呉の職人かどうかはわからない。けれども、大量に作っている。

それは、これまでの弥生時代の終末期、古墳出現期の墳丘墓から出ている鏡が破砕鏡であって、全く三角縁のものを含まない。直径 22cm を超えるような三角縁神獣鏡は、これは 3 世紀の後

半、４世紀の初めに入った位に大量に出回っている。そういう三角縁神獣鏡を、全国各地のいろんな首長が持っていて、自分の墓にこれを入れるということは、小林さんのころからずっと言われているように、中央政権の有力な首長と地方首長との、それは政治的な関係、同盟関係と呼ぶか、従属、支配関係というか、それは明確には分からない。言い切れませんけれども、地方との関係を考えるべきだと私は思っております。そういう訳で、私の論理からいけば、私はつい３か月まえまでは、小林行雄説だったんです。三角縁神獣鏡は、これはもちろん国産のものもありますよ。だけれども、出来のいいものは皆中国製だ。という風に私は思ってきました。でも、これでは論理がなかなか明らかにならない。最近の出現期古墳から出てくる半三角縁、斜縁神獣鏡等の鏡の、破砕鏡の出方をみれば、どうやら三角縁神獣鏡がどっと入ってくる時期は、桜井茶臼山古墳の登場の時期にちょうど合ってくるんじゃないかなという風に現在は思っています。私が公式に「三角縁神獣鏡が国産なんじゃないか」といったのは今日が初めてなんですけれども。ま、考古学というものは実際の事実が出てくれば、今までのことがひっくり返されるのと同じだからね。

そこで、反町遺跡はこの地における大集落であります。これまでに全国でたくさんの発掘が行われて参りましたけれども、今、全国の市町村を見たって、大きな市町村と小さな村と違う、地域が違う、地形が違う、交通路が違う、大小のムラがあるのは当然です。しかも、その地域の産物、「荒川」というこの河川を頭に浮かべざるを得ない。つまり荒川の流域とか多摩川の下流域とか、千葉県の養老川とか、河川の下流域こそ有力な大古墳が出現する地域でありまして、そういう地域に向かって、北陸や東海や畿内や中国から人々がやって来たと、考えられるかもしれません。それが何の契機でやってきたかは、なおハッキリいたしません。それは、戦乱の関係もないとは言えない。あるいは新しいムラを造るという、いろんな地政学的な観点から来た者もある。まだ現在の日本の考古学の発掘手法では、そこまでは決めつけるわけにはいかないでしょう。

それにしても、埼玉県における五領や反町遺跡は第一級の遺跡です。この大集落遺跡の調査の結果が、たぶんこれから相当注目を浴びるというか、反町遺跡の分析結果はこれから 50 年、70 年、80 年先の日本の考古学の集落遺跡の一つのモデルになっているのではないかなと思います。そういう点で土器を専門になさる若い研究者の方は、土器を触ってください。私も若い頃は土器に触りました。触って、「この跳ね上がり口縁、これこそが庄内式だな」といったものです。ま、そういう点で、埼玉県の若手の研究者は、もっともっと細かく、もっと微細な研究をして欲しいと思います。また、日本考古学の全体像を考えるような考古学を、ぜひ目指して欲しいと思います。このところ考古学概論を、旧石器からずっとここまで、しゃべる人がいないんです。そういう点で、是非、埼玉県の中堅、若手の皆さん、大いに勉強して頂きたいということです。私に与えられ時間は２時 40 分までということで、私はこれで終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございます。

本稿は、平成 27 年２月１日（日） 埼玉県熊谷市立文化センター文化会館で開催された、埼玉県埋蔵文化財調査事業団設立 35 年記念事業・平成 26 年度ほるたま考古学セミナー『見えてきた！！古墳時代の幕開け―東松山市反町遺跡を中心に―』において特別講演をいただき、大塚先生の御厚意により収録させていただいたものです。

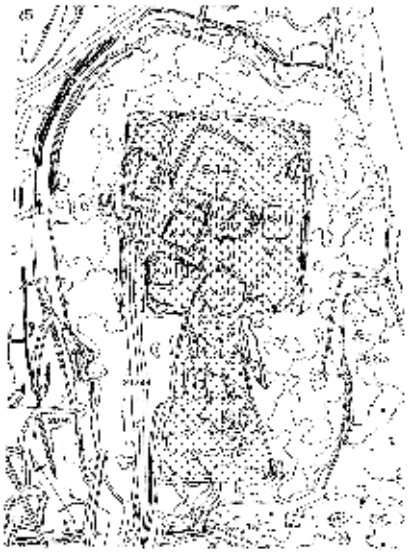
埼玉県吉見町　三ノ耕地遺跡１・２号墳（前方後方墳）

２号墳

２号墳出土土器

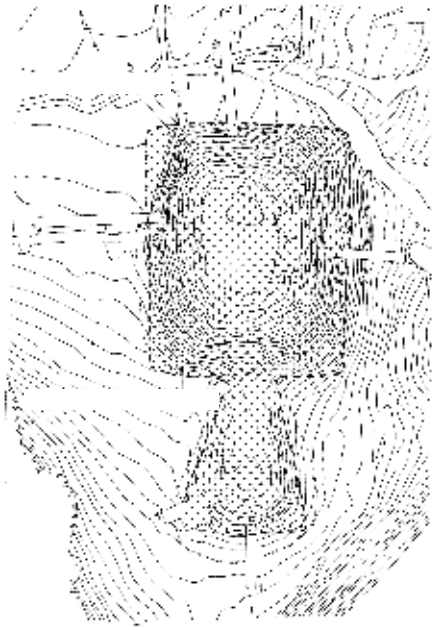
１号墳出土土器

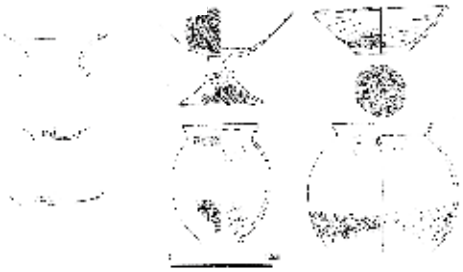
１号墳



上・下図『埼玉県立史跡の博物館紀要』第６号　2012　利根川章彦論文より

埼玉県吉見町　山の根古墳（前方後方墳）





山の根古墳と出土土器

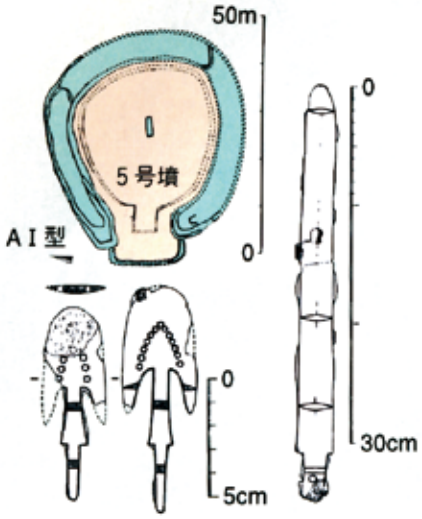
埼玉県東松山市　高坂古墳群

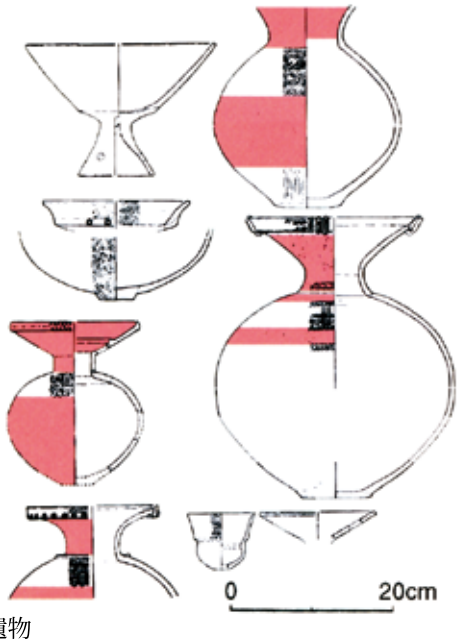
三角縁神獣鏡

東松山市教育委員会提供

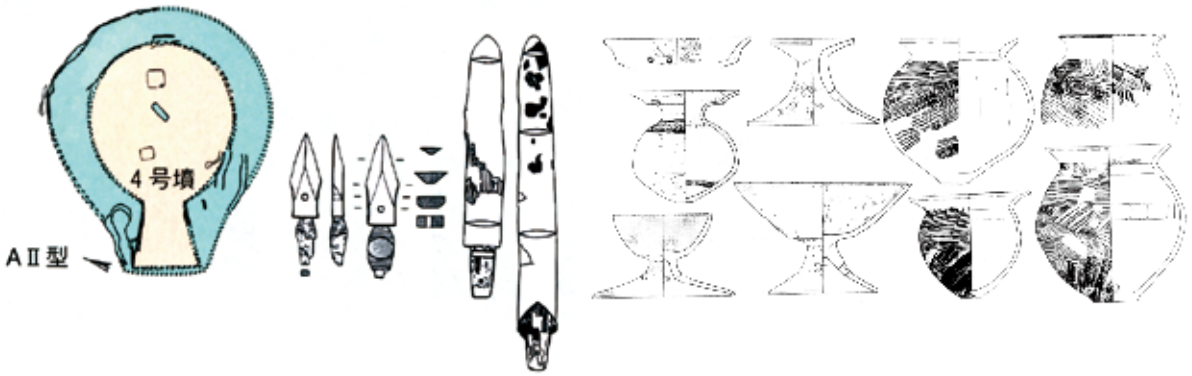
図版２

千葉県市原市　神門３・４・５号墳

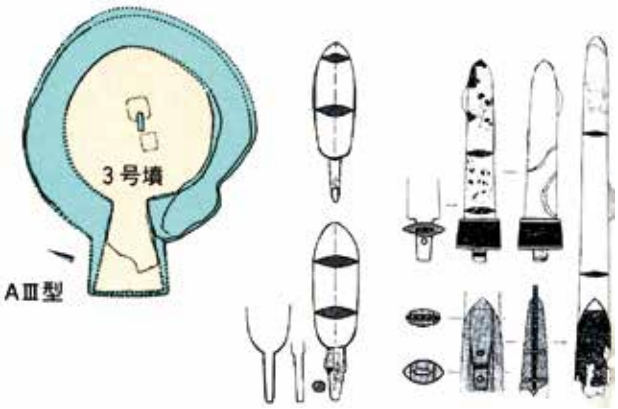


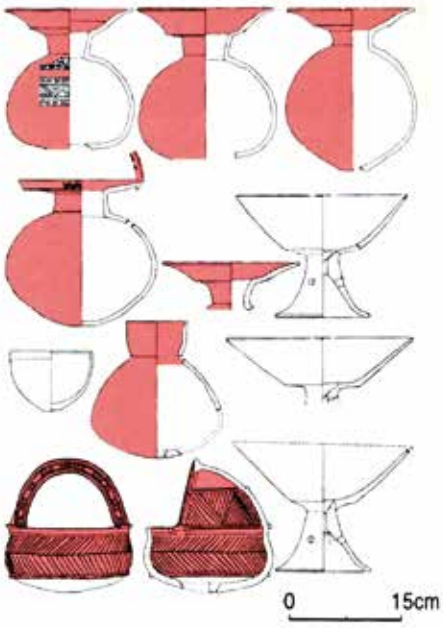


神門５号墳と出土遺物



神門４号墳と出土遺物



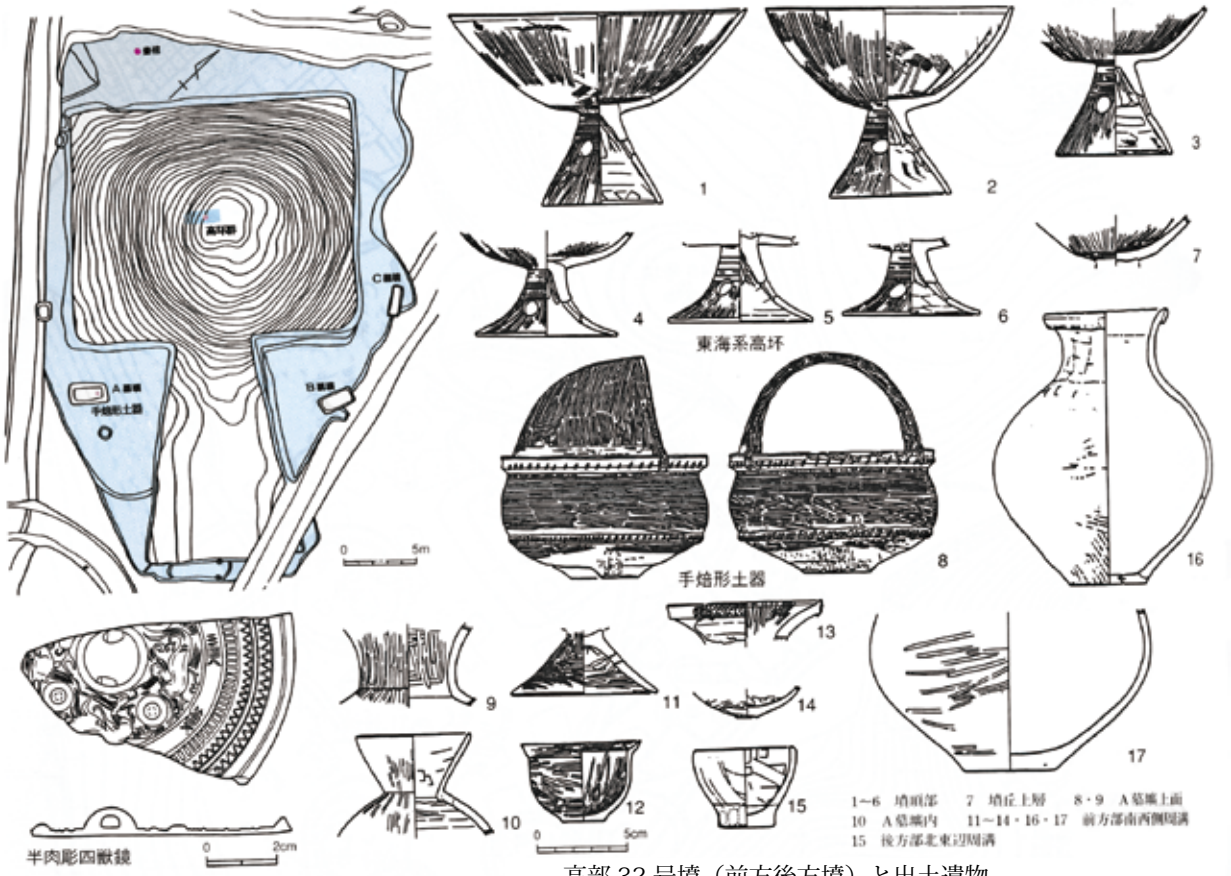


神門３号墳と出土遺物

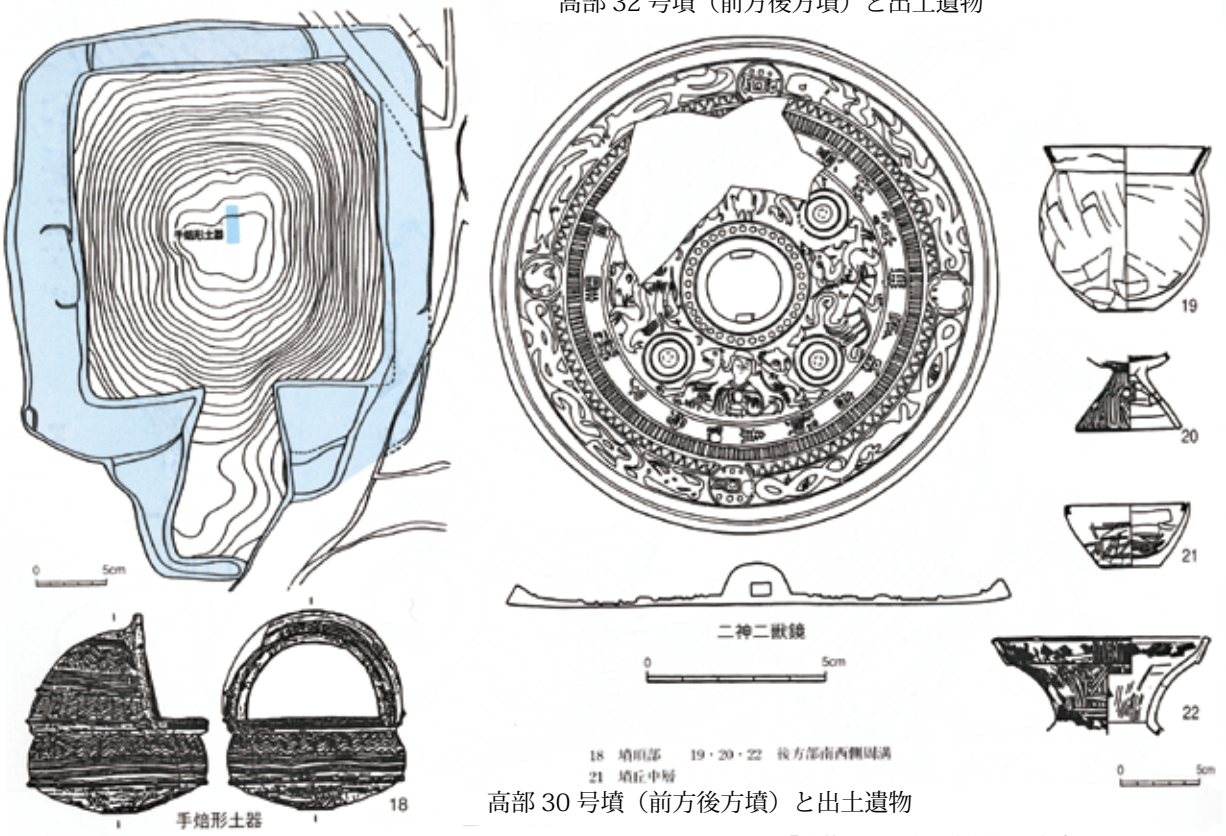
『千葉県の歴史』資料編・考古２　2003 および
『古代』第 123 号　2010　比田井克仁論文より

図版３

千葉県木更津市　高部古墳群



高部 32 号墳（前方後方墳）と出土遺物



高部 30 号墳（前方後方墳）と出土遺物

『千葉県の歴史』資料編・考古２　2003 より

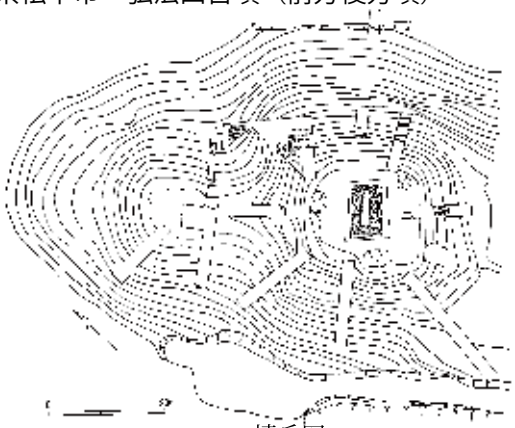
東日本における古墳出現期の副葬品

古墳名	所在地	墳形	規模（m）	副葬品 鏡	玉	鉄剣	鉄槍	鉄鏃	工具
高尾山	**静岡県**	■	**61.7**	**浮彫式獣帯鏡１（破砕鏡）**	**勾玉１**	**－**	**2**	**鉄鏃 32（柳葉、腸抉三角、長三角）**	**錐１**
東原１	長野県	■	63	浮彫式獣帯鏡１	管玉2 ガラス小玉738	1	2	鉄鏃１（柳葉） 鉄鏃24（柳葉、定角）	鉄斧１ 鉄１
高部32号	千葉県	■	32	浮彫式獣帯鏡１（破砕）	－	－	2	－	－
高部30号	千葉県	■	34	二神二獣鏡１（破砕鏡）	－	2	－	－	
神門5号	千葉県	●	42.5	－	ガラス小玉6	1	－	鉄鏃2（柳葉）	－
神門4号	千葉県	●	49		管玉31 ガラス小玉384	1	1	鉄鏃41（定角）	
神門3号	千葉県	●	53.5		管玉10 ガラス小玉103	1	1	鉄鏃2（柳葉）	錐1

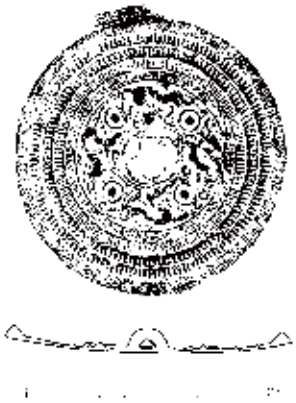
●：前方後円墳、■：前方後方墳（墳丘内の埋葬施設は竪穴式）

沼津市教育委員会『高尾山古墳発掘調査報告書』2012　滝沢誠論文より

長野県松本市　弘法山古墳（前方後方墳）

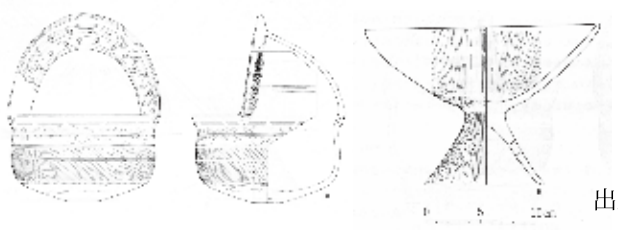


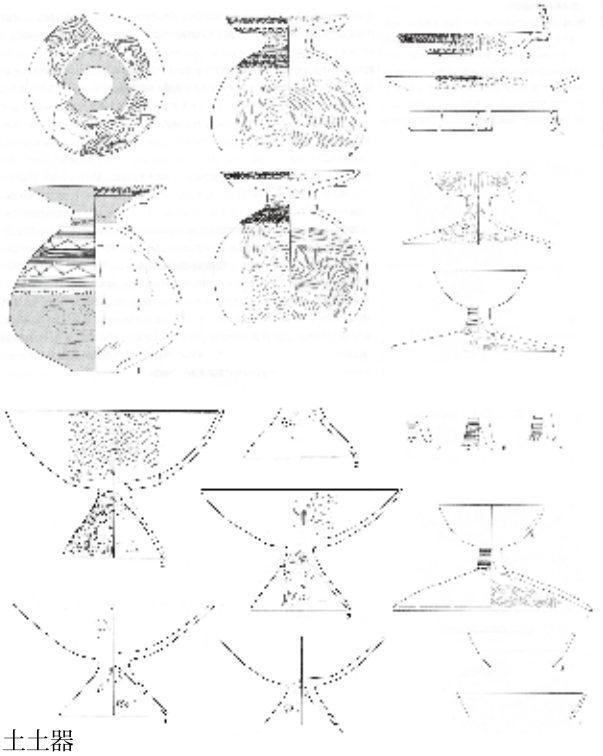
墳丘図



斜縁四獣文鏡

鉄剣

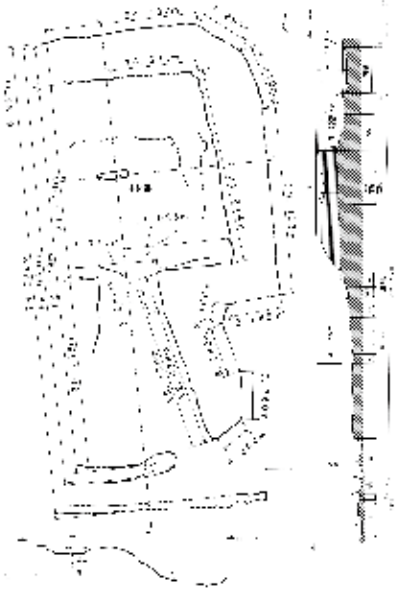




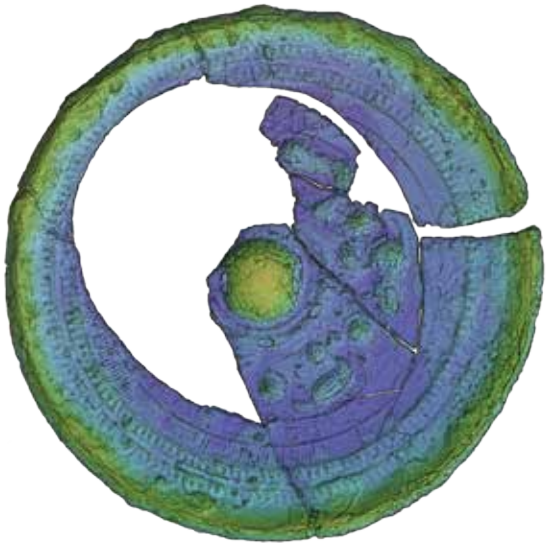
出土土器

松本市教育委員会『弘法山古墳』1978
同　　『弘法山古墳出土遺物の再整理』1993 より

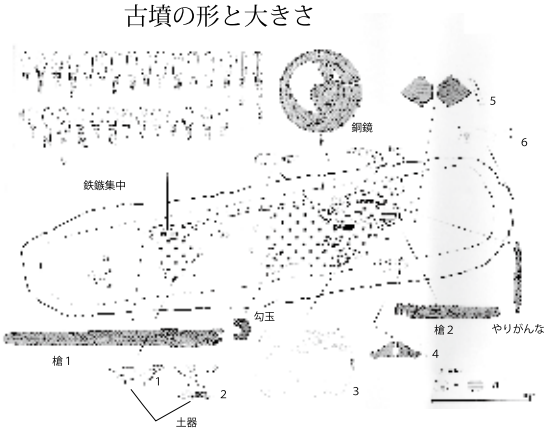
静岡県沼津市　高尾山古墳（前方後方墳）



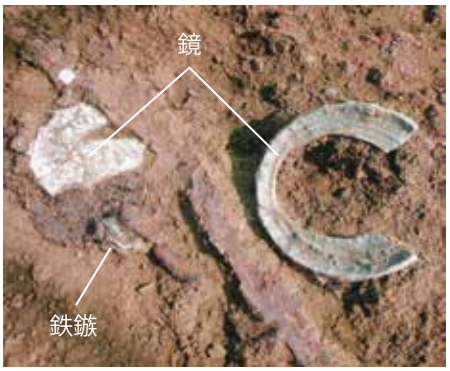
古墳の形と大きさ



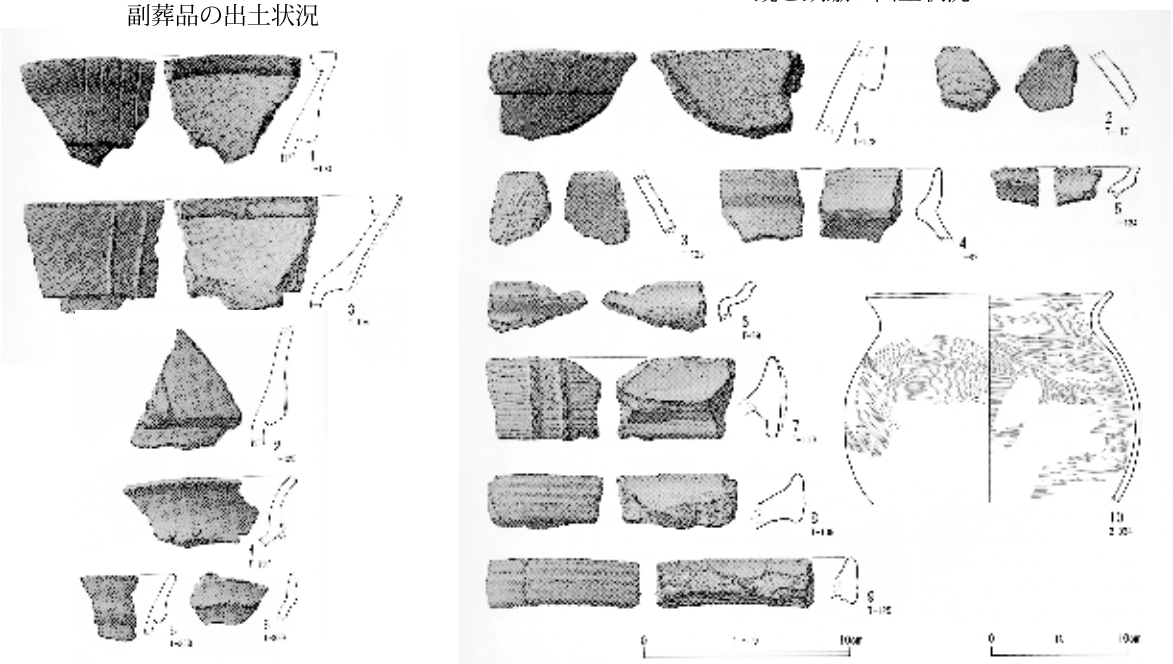
青銅鏡（上方作形浮彫式獣帯鏡）
３次元レーザースキャナによる画像



副葬品の出土状況



鏡と鉄鏃の出土状況



墳丘・周溝出土の土器（大廓式土器）

沼津市教育委員会『高尾山古墳発掘調査報告書』2012 より

兵庫県加古川市　西条 52 号墓（墳丘墓）

全景（前方後円形墳丘墓）

石室（破砕鏡出土）

石野博信氏撮影　香芝市二上山博物館提供

岐阜県美濃市　観音寺山古墳（墳丘墓）

全景

方格規矩四神鏡　径 23.6cm

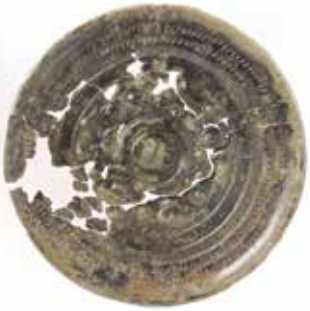
重圏文鏡　径 9.5cm

美濃市教育委員会提供

徳島県鳴門市　西山谷２号墳（墳丘墓）

全景（北から）

竪穴式石室の構造（北から）



斜縁獣帯鏡　径 12.5cm

徳島県埋蔵文化財総合センター提供

京都府南丹市　黒田古墳（墳丘墓）

全景（南から）

埋葬施設

割って副葬された鏡（双頭龍文鏡）

南丹市立文化博物館提供

兵庫県たつの市　綾部山 39 号墓（墳丘墓）

遠景（東から）

画文帯神獣鏡　径 11cm
たつの市教育委員会提供

三重県伊賀市　東山古墳（墳丘墓）

全景（南西から）

埋葬施設と副葬品　鉄剣長さ 28.7cm
三重県埋蔵文化財センター提供

徳島県鳴門市　萩原１号墓（墳丘墓）

埋葬施設（東から）

出土遺物
長頸壺　高さ 27.2cm

画文帯神獣鏡　径 16.1cm
徳島県埋蔵文化財総合センター提供

※図版６・７は大阪府立近つ飛鳥博物館
『卑弥呼死す　大いに冢をつくる』2009 より転載

研究紀要 第３２号

２０１８

平成３０年３月１３日　印刷
平成３０年３月１６日　発行

発　行　公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒 369 － 0108　熊谷市船木台４丁目４番地１
http://www.saimaibun.or.jp
電　話　0493 － 39 － 3955
印　刷　関東図書株式会社